

闇から光へ

芳川 敏博 (京都府城陽市)

I はじめに

『野性の呼び声』で自主性や孤独を追求し、『白牙』の中では協調性や愛をテーマにして、ジャック・ロンドンは新しい幸福や生き方を求めている。

White (白) は白人や優雅を意味することもあれば、*White Logic* (白い論理) にあるように厳しい極北の地では「死」を表わすこともある。また、*Fang* (牙) は極度の飢えや危険を暗示している。

このように考えると、*White Fang* (白牙) は作者のロンドン自身であろう。『白牙』の書かれた1905年にロンドンがベシー・マダンと離婚した後、チャーミアン・キトリッジと再婚し、カリフォルニアのソノーマ郡に農園や家を手に入れたことと、この作品は少なからず関連していると言われている。

狼 (自主性・孤独・個人・闇) と犬 (協調性・愛・集団・光) の血を持つ白牙は、極北の洞穴の中の闇 (不安感・恐怖・飢え・不幸・攻撃・野性) から南のカリフォルニアの光 (希望・快適感・満腹感・幸福・服従・人間性) へと、厳しい環境や危険と闘いながら生きていく。ロンドンは『白牙』の中で、「闇」と「光」という概念を写實的に、また、象徴的に用い、作品に深みと緊迫感を与えている。

III 写實的な「闇」と「光」

A 写實的な「闇」の実例

死と隣り合わせの極北の地で、孤独と飢えに悩まされながら、真夜中にさまよう狼の「闇」の部分、ロンドンは次のように写實的に述べている。

長い、泣き叫ぶような吠え声が、ひどく悲しそうに、暗闇のどこからともなくひと声聞こえてきて、ヘンリの話の腰を折った。(p.13)

白牙は生まれたばかりの頃、外界の世界から隔離された、うす暗い洞窟の中で生活をしていた。それは、以下のように記されている。

自分の世界はうす暗かったが、そのこともわからなかった。ほかの世界のことがわからなかったからだ。そこはほの暗かったが、ほかの光に目を順応させる必要はなかった。その世界はとても小さく、限界といえば巢穴の壁だ。

(p.87)

B 写実的な「光」の実例

光の方向に向かって進むことが、子狼にとって成長することを意味しており、自然に順応している様子を次のように記している。

たえず光が明るさを増していた。恐怖がもどるようにとしきりに促したが、成長は前へ前へと駆り立てた。突然、気がついてみると、ほら穴の入り口に来ていた。・・・光は、痛いほど明るくなっていた。目がくらんだ。同様に、空間がこんなに突然途方もなく広がったものだから、目まいがした。反射的に、目はその明るさに順応し、焦点を合わせて、いよいよ遠くなった物体を見た。 (p.98)

日光がいつも降り注ぎ、黄金のようにきらきらと輝く南の地に、白牙はやっとたどり着くことができた。その様子を以下のように写実的に述べている。

近くには、手入れされた草の若々しい緑色と対照的に、日に焼けた干し草畑が黄褐色と金色に見える。向こうには、黄褐色の丘や高台の牧草地がいくつも見える。・・・白牙には、こうしたものをどれも見る機会などほとんどなかった。 (p.308)

Ⅲ 象徴的な「闇」と「光」

A 象徴的な「闇」の実例

子狼は、空腹を満たすことが生きるために不可欠なことで、常に飢えの

危険性があることを無意識のうちに自覚していた。そのことについて、ロンドンでは次のように象徴的に述べている。

短いほら穴生活のあいだには、恐ろしい目にあうようなことは一度たりともなかった。なのに、恐怖は内に潜んでいた。それは、何千何百万もの生命を通じて、遠い祖先から受け継がれてきたものであった。・・・飢えを知っていたから、飢えを満たせないと、制限を感じた。(pp.94-95)

犬は集団で行動しており、野性が残る白牙でも単独で犬たちを攻撃することは恐怖であった。そのことを以下のように象徴的表現を用いて、説明している。

白牙は野性の象徴であり、野性の化身であった。だから、犬たちが白牙に歯をむき出すときには、森の暗がりやキャンプの焚き火の向こう側の暗闇に潜む破壊力から、身を守っているのだった。それでも、犬たちがはっきりと学んだ教訓が一つあった。それは、一緒にかたまっているということだった。白牙は恐ろしすぎて、どの犬だって単独でまっ向から向かってはいけなかった。(p.203)

B 象徴的な「光」の実例

子狼は目を閉じていても、光が非常に快適なもので、生きていくために不可欠であることを次のよう実感している。

そこから入ってくる光が、かたく閉じたまぶたにあたると、目と視神経は、暖かい色の、妙に心地のよい、火花のようなひらめきにドキドキした。その体の生命と、体のあらゆる繊維の生命、体の物質そのものであって自分1個の生命とはまた別の生命が、この光を求めてやまず、その体を光へと駆り立てた。(pp.87-88)

白牙はスコットの深い愛に触れることによって、「闇」から「光」へと移行することができたのである。その部分は以下のように記されている。

ウィードン・スコットこそが、実はこの親指なのだった。白牙の本性の根っこのところまで行き着き、衰えてあわや死にかけていた生命のさまざまな潜在力に優しく触れたのだ。そうした潜在力の一つが愛であり、それが好ましさに取ってかわった。そしてこの愛こそは、神々と交わるなかで、白牙を感激させた最高の感情なのであった。 (pp.277-278)

IV 終わりに

視覚はすべての感覚の中で最も重要で、約80%を占めている。闇の中では残りの約20%の感覚しか使えない。その中では不安感が支配的である。しかし、人は光(希望)を求めて歩き始める。

白牙は極北の真っ暗な洞窟から光を求めて自分探しの旅をし、途中、過酷な環境に翻弄されながらも希望を失わず、ついに南の日光が降り注ぐ安住の地にたどり着く。まさに、光り輝く黄金は孤独な極北の地にはなく、人間との交流がある南の地で見出すことができたのである。

白牙が困難な環境に打ち勝つことができたのは、父親から受け継いだ攻撃性・生命力と母親から受け継いだ忠実性・適応力だけではなく、人間(神・リーダー、光)からの深い愛があったからであろう。焚き火(力・壁)を乗り越え、白牙は文明社会の仲間入りを果たし、「抑制」、「バランス感覚」、「冷静さ」、「寛容性」という新しい掟を身につけていった。

ロンドン『白牙』の中でより効果的に「闇」と「光」という概念を写實的、象徴的に用い、作品の構成と内容の両面できわめて優れた作品に仕上がっている。『白牙』は、『野性の呼び声』の単に逆の物語であるにすぎないという批判があるが、以上のような新しい概念の導入と同時に、ロンドンの人間としての成長過程において重要な位置を占めている。人生の「闇」と「光」という体験を内在化して述べているので、この作品はロンドンのその後の人生や『マーティン・イーデン』のような作品に大きな影響を与えている。

注：日本語訳やページ数は社会思想社の現代教養文庫『白牙』：辻井栄滋訳、2002年版による。なお、下線は筆者による。